

水産研だより



【今回の内容】

- 1 カジカの産卵期を調べ中
- 2 イタセンパラの稚魚が多数泳出しました。
- 3 水産研究所に新たに漁業研修部ができました。

1 カジカの産卵期を調べ中

魚の無秩序な移植・放流は、在来魚や在来個体群などへの悪影響が指摘されています。また、各地でそれぞれの環境に適応してきた個体群とは別の個体群由来の魚の放流は、むしろ資源の減少を引き起こす危険性も考えられます。しかし、このような問題に対する説明は、これまで遺伝的側面からであることが多く、難解となりがちでした。

そこで、各地の個体群で遺伝的分化が解明されつつあるカジカについて、産卵実験や組織観察を行い、産卵期が個体群にそれぞれ固有なものであるかを調査し、無秩序な移植・放流の問題点を指摘するわかりやすい説明材料を得ようと考えています。

産卵実験は、いろいろな地域の親魚(いろいろな個体群)を研究所において同じ井戸水を用いて飼育し、産卵させることで、同じ環境条件においた場合に、各個体群が同じ時期に産卵するのか、あるいはそれぞれに固有の産卵期を持っており、その固有の時期に産卵するのかを調べるものです。これまでの観察では、同じ飼育水で産卵させても、個体群ごとに産卵期が異なっていました。また、同じ時期にいくつかの個体群について河川で調査したところ、飼育魚と同じ時期に産卵が行われていると考えられました。

地理、気候などを考慮に入れて見ると、標高が低く積雪量の少ない地域の個体群では産卵期が早く2月から開始されるのに対して、標高が高く積雪量の多い地域の個体群では産卵期は4月に入ってようやく始まるなど、カジカは生息地域の環境に合わせて固有の産卵期を持っているものと考えられます。

(本研究はJSPS科研費26450277の助成を受けて行っています)



水槽内で卵を守る雄親

水系	(河川)	2月	3月	4月	5月
長良川	A川				
	B川				
木曾川	C川				
	D川				
神通川	E川				
	F川				
庄川					
九頭竜川					
南川(福井)					
那珂川(茨城)					

産卵実験での産卵期の例

(担当:下呂支所 藤井)

2 イタセンパラの稚魚が多数泳出しました。

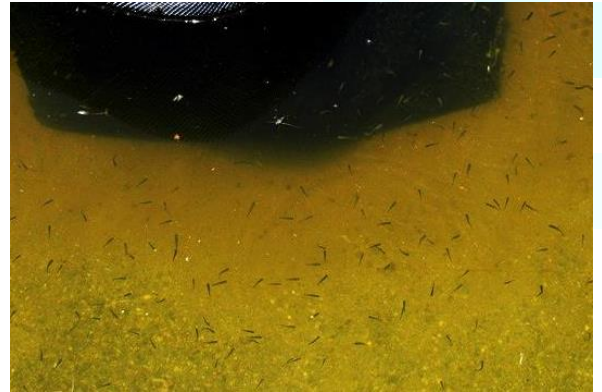
水産研究所は、平成24年度から清流の国ぎふ森林・環境基金事業によって木曾川水系のイタセンパラの生息域外保全に取り組んでおります。昨年度の繁殖試験の結果、今年の5月には多数の稚魚が産卵母貝であるインガイから泳出しました。

これまでの4年間、当所の野外池での最適な繁殖条件を探索してきましたが、今年は、50尾(♂30、♀20)の親魚から、稚魚725尾を、自然泳出させることができました。

近い将来に中部地域環境事務所を中心とした関係機関とともに元の生息地への野生復帰ができるよう、引き続き研究に取り組めます。



野外池での泳出状況観察作業



野外池での稚魚のようす

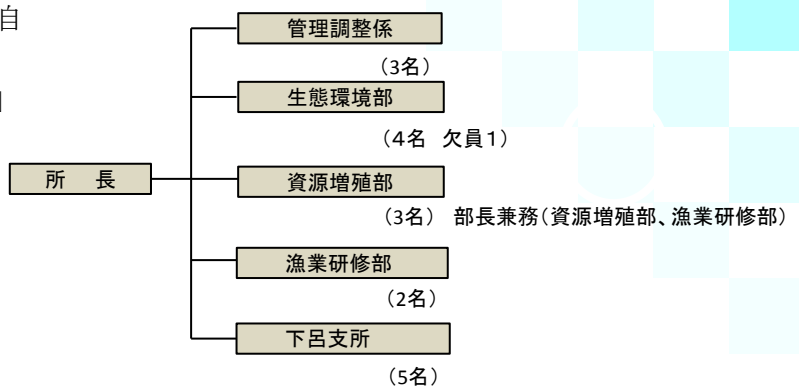
(生態環境部 小松)

3 水産研究所に新たに漁業研修部ができました。

平成27年12月15日に「清流長良川の鮎」が世界農業遺産に認定されました。「長良川システム」は持続的な内水面漁業の国際的なモデルと期待されており、発展途上国への技術支援など、国際的な貢献も果たしていくため、水産研究所に今年度新たに漁業研修部が設置されました。

今年度中に「内水面漁業研修センター」を水産研究所内に設置(平成28年7月24日開所)し、今後、開発途上地域からの研修生を受け入れたり、同地域へ研究員等を派遣して技術支援などを行う計画です。

研修生の受け入れのために、岐阜県独自の研修プログラム(講義、実習、視察で構成され、世界農業遺産「清流長良川の鮎」を核とした、「持続可能な内水面漁業と地域振興ー里川システムの推進(仮題)など)の開発に取り組んでおります。



平成28年度の職員の異動は次のとおりです。

○ 転入者

部長研究員兼支所長(前 農政課水産振興室) 桑田 知宣
 資源増殖部長兼漁業研修部長 (同上) 松田 宏典
 下呂支所 専門研究員 (同上) 徳原 哲也
 生態環境部 研究員 新任 小松 史弥
 漁業研修部 主査(清流の国づくり政策課) 柴田 裕一

○ 転出者

中居 裕 里川振興課水産振興室
 後藤 功一 里川振興課水産振興室

(漁業研修部 松田)